

## 雪の一の倉沢

岩井 淑

上越線・水上駅の手前より蛇行する列車の窓から谷川岳の岩壁が見える。白い。雪化粧したのだ。列車にはすでに暖房が入っており、頬をなでる風もヒンヤリと冷たい。

「第3ルンゼで事故発生。救助隊出動中。山頂の積雪30cm」と白いチョークで書かれた掲示板を指導センターで見たのは3時間後のことだった。

土合橋の脇から湯檜曾川右岸につけられた登山道を登って行く。一応、新道と名付けられているのだが、マチガ沢の出合を過ぎる頃から川原の中を歩いたり、丸木橋を渡ったり、石を飛び越えたりしながら落ち葉~~の~~ブナの中を登っていく。パシッ パシッという音とともに雨が吹きかかる。サクサクという踏み音以外には聞こえてくる音はない。実に静かだ。蓬峠へと抜けるこの登山道も歩く人はあまりいないのだろうか。ゆっくり歩いて1時間30分程で二階建てのJRの監視所が現れ、その脇から蓬峠へ伸びる道と別れて旧道へと15分ほどの道を急登する。道幅は30~50cm程である。

旧道は4m程の道幅があり今までのデコボコ道とは異なり、車も走れる程である。しばらく歩くと幽の沢の出合いになるが、ここから見上げる岩壁も黒々とした岩肌に新雪をまといなかなか迫力あるものである。3人のカメラマンが盛んにシャッターをきっている。実に絵になる風景である。ここにもこの岩壁で若い命を終えた人のプレートがはめ込まれているのに出会う。その人が被ったのであろう黄色のヘルメットも供えられている。

時刻は12時ちょっと前で腹もそろそろすいてきていたので、オーバーハングの岩を利用して風雨を避けながらの昼食にする。魔法瓶のコーヒーがなんともいえず美味い。冷えている身体にしみわたり活力がわき出てくるように感じる。弁当は高崎駅で購入してきた『だるま弁当』である。久し振りに食べたが以前のものより小振りになったように感じる。美味い弁当だった。弁当途中で先程すれちがったカメラマンの3人連れが戻って来たが、

「お疲れさま」の挨拶を残して下山して行った。ここ幽の沢までは車が入ってこれないので人が少なく気持ちがいい。静かな風景の中に身を置くことができるのだ。一の倉の出合いともなるとそうはいかない。40台もの駐車スペースにぎっしり並んだ車と駐車スペースの空き待ちの長〜い車の列が出来るのだ。案の定、スカートにハイヒール姿の女性が寒さに震えているのがあちこちに見受けられる。10月下旬となれば山はもう冬なのだ。

ゴォーッ ゴォーッというすさまじい風音とともに山肌を下から上へとふき抜けていく。その一瞬後には風の流れはピタリと止み、薄日が射してくるという状況が間断なく繰り返されていき、本格的な雨の降りだしとなった。

一の倉沢の岩壁にはガスのため上部が見えないが、しっかりと雪がまとわりついている。出合いから踏み込んでみると、前夜からの雨のために増水した沢は、献花を水中に没している。上部は見えないのだが、右側の衝立岩ははっきりと姿を現し、下部の紅葉に浮かび上がる光景はまさにウーンとうなる景色である。

下から見上げただけでも強烈である。山肌が白く雪化粧をし、V字谷の両脇は紅、黄、

橙に染まっている。カエデ、ブナ、ウルシ、クヌギ、ツタ、などがすぐそこまでやってきている冬に追いつかれるのを嫌うかのように一斉に燃えだしている。

しかし、このすばらしい景色に魅了され、多くの若者が岩壁登攀によりその若い命を燃焼させることなく逝ったのか。出合いの岩壁には所属山岳部の手によるプレートが幾つも嵌め込まれている。その数は20枚を超える。それらの1枚1枚に人生の縮図が凝縮されているのかと思うとぐっと胸に突き上げてくるものがある。

天神平でも観光客を運ぶゴンドラは満杯であり、乗客は雪の中で50分も待つというのに次々に乗り込んで行くのだ。天神平は一面の白銀の世界であり、紅葉はすでに終わってしまっているというのに軽装のまま、何かにひきつかれるように登っていくのである。この時期に紅葉を眺めるのであったならば湯檜曾川沿いの旧道から新道へという今回のハイキングコースが一番なのである。

1993. 10. 24. 記